広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	上原輝男の「ことばの教育」を最新科学の立場から裏づける ： 個々人や民族の「体質」に応じて「構え」を育てるとは
Author(s)	宮田, 雅智
Citation	国語教育思想研究 , 22 : 53 - 66
Issue Date	2021-05-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050898
Right	
Relation	

上原輝男の「ことばの教育」を最新科学の立場から裏づける
－個々人や民族の「体質」に応じて「構え」を育てるとは－

児童の言語生態研究会　宮田雅智

キーワード　上原輝男　児童の言語生態研究会　母国語教育　生理学　脳科学　身体感覚

１、はじめに　（問題の所在）

「言葉に命を与えることが人間教育です。」（昭和５８年　玉川大学文学部教育学科国語教材研究講義　以下講義での言葉はすべて玉川大学でのものによる）

が恩師である上原輝男先生の「ことばの教育」の基本的な考え方です。

全教科・領域を上原先生の観点からというのは児童の言語生態研究誌１９号にまとめました。（注１）

また上原先生は「児童の言語生態研究会」（以下、児言態）を主宰しながらも「児童後」の段階も研究していく必要性を説かれていました。私は体を壊して小学校を退職し、中高生や大学生、社会人相手に家庭教師をするようになったことから、そうした点についても同雑誌１８号にまとめました。（注２）

さらに昨年から就労支援施設エナベルのグループワークを担当する機会を得て、現代社会や学校教育の歪み等々によって精神を病んでしまった方々を通して、上原先生の母国語教育が生涯にわたっての「構え」と関わることを、前回のこの冊子にまとめました。（注３）（以下「前稿」）

このように上原輝男先生の説かれた教育に関して紹介してきたわけですが、いつも感じていたのは、先生のことを知らない一般の方々にとってはなかなか説得力を持たないことでした。

まして、上原先生の説く教育は、教育本来が目指す根源的な部分、世間一般で望まれているような、とにかくテストの得点をあげるための方法論とは全く違います。

実は上原先生の専門は教育学ではなく民俗学の「心意伝承」…特に無意識の世界を踏まえての「日本人（人間）の心の探求」が最大の関心事でした。冒頭に紹介した言葉の中の「人間教育」というのも、一般に考えられているような「社会に適応できる豊かな人間」という意味合いよりも、もっと根源的な視点に立っています。

ですから上原先生の「私論」というよりも先生の師である折口信夫先生の説かれた万葉時代の頃からの教育観「日本の教育は感染作用」（注４）や、江戸時代の発想などを踏まえての、「日本人の体質」に合った教育観を現代に生かすには、ということによるものでした。

ただ、こうした教育観は「時代錯誤の古臭い教育の考え方」と受け止められてしまいがちなので、上原先生の教育観については、なかなか聞く耳をもって頂けません。

「生きたことば」の獲得のためには身体感覚が大切という「人間観」も、上原先生だけではなくずっと以前から日本人は大切にしてきました。

（注５　私が影響を受けた方々などを紹介しています）

しかしそうした主張は一部の教育関係者には強く支持されながらも、時代の大勢としては、ますます「形だけの知識」ばかりを頭の中に放り込む教育が圧倒的に行われています。この背景には「人間を支配しているのは大脳」という考えが現代人にとっての常識になっていることも大きいと思います。

ここ数年、ＮＨＫで放送された「人体」に関するいくつかの番組の内容が、上原先生の説かれてきた教育・日本古来の人間観の裏付けとなっている、と私には受け止められました。

実際に先生は講義の際にも「教育科の学生なのだから、生理学の勉強もきちんとしておく必要なありますよ」と強調されていました。特に初等教育の段階は、体感と言葉が一つなのだから、人体の仕組みもきちんと踏まえなければ成り立たないということからです。

そのような最新の生理学の観点から、上原先生の「ことばの教育」についての大枠を整理してみよう、というのが、本稿をまとめた動機です。

2、最新の「人体観」と「日本人の教育観」へ

最新科学の「人体観」を知る上で、私が特に参考にしている番組の一つ目がこれです。

「人体 神秘の巨大ネットワーク」シリーズ

番組の第一回、プロローグにあった言葉です。

「これまで人体のイメージといえば　脳が全身の司令塔となり、他の臓器はその指示に従って働く　というものでした。

ところが最新科学はそんな常識をくつがえしました。

なんと体内のあらゆる臓器が脳を介さず、直接情報をやりとりして、私達の命や健康を支えているのです。」2017年9月30日放送

ここから上原先生の考える「教師と子ども達との関係」を考えたい、というのが本稿の第一の目的です。

「脳を教師」「各臓器を子ども達」と考えてみましょう。従来の「脳が全身の司令塔」という考え方が、高度経済成長期や、成果主義・競争原理の現代教育の「教師主導」の考え方にあてはまります。官僚制や軍隊式の「上意下達」的な発想ともいえます。無駄なくいかに効率的に大人の期待する成果が出せる子どもに育てるか…。

私が小学校に勤務していた昭和から平成に移行した頃は、教師主導の授業からの脱却が盛んに強調されていました。

ところが平成後半になり、学力テストの点数ばかりで学校同士を競わせ、教師を評価する風潮が強まったことから、再び教師主導に凝り固まってしまった印象があります。

社会全体としても「エリート教育」を歓迎する風潮がもてはやされました。人間同士に明確な格差意識をもたせ、下位の者は上位のものに服従せよ、という空気。

これは、上に立つ教師の枠の中の発想しかとれない子どもばかりが育つということでもあります。多様に変化する社会に柔軟に対応できる子どもの育成が叫ばれているにも関わらず、現状ではますます融通のきかない子供たちが育っているように私にはみえます。

現代の子ども達の多くが直面している人間関係の取り結び方の問題もこうした上下関係意識が深く関わっています。

「リーダーの育成が大切」という発想には一理あることは認めます。しかし「みんなをまとめられる子」というイメージばかりでのグループ形成で、子ども達の表面的な言葉のやりとりで「みんな仲良くまとまっているから安心」と思っていては、とんでもない状況がますます増えているという事も大人はしっかりと把握しておく必要があります。それは実際には「まとまっている」のではなく恐怖心から「従わされている」という場合が少なくないからです。

主導権をにぎっている子に嫌われたら居場所がなくなってしまう…常にそうした子の顔色をうかがいながら、見かけ上は「仲良くしている」のを必死に演じ続けている子ども達。常に「我慢」を強いられている結果、精神を病んでいってしまいます。スマホなどの情報端末の普及がさらに追い打ちをかけ非情なストレスになっています。

こんな事例もあります。ある小学6年生の女の子は、自分が必死に仲良しであることを演じてきた結果、友達が信じられなくなったと話してくれました。自分に接してくれる友達がいても、それが、自分がしてきたのと同じように、友達を装ってくれているだけではないか、と疑心暗鬼になってしまうというのです。そんな様々な負の連鎖が日常的に起きているというのです。

上意下達式の発想のもう一つの大きな問題点は、かつて「指示待ち症候群」と呼ばれたような人間ばかりを育ててしまうことです。

想定外の出来事に遭遇した場合に自分で判断し対応できるか。東日本大震災の時に、非常に広範囲にわたって役場やライフラインや通信網が壊滅的な打撃を受け、上からの指示が機能しなくなってしまったことは記憶に新しいことです。

しかし、あの時には、海外の人たちが驚いたように、各避難所で誰に言われるわけでもなく幼い子どもから年配者までが、それぞれをわきまえて、自分の出来る事で互いに助けたって乗り切ることができていました。

こうした組織の動きは、最新の人体観と似ています。そしてそれは古くは日本神話の中にも出てきます。そもそも神話では最高の地位にいる別格の神々が冒頭から姿を現さなくなります。それから天照大神が神々を集めての会議の場面。根の国

の様子をみにいくのに誰がふさわしいのかを話し合っているわけですが、天照様は自分の意見を言いません。神々の結論で行ったことが上手くいかなくても、また同じメンバーを集めて話し合いをしてもらい、その結果を尊重しています。「良きにはからえ」という姿勢とも言えましょう。

特筆すべきは、下に決めさせたからといって、上手くいかなかった時に天照様は神々を批判しません。責任は任せた自分にあるという姿勢であることが伺えます。また、神は天から人間界のすべてを把握していて、時に天罰を下す、という位置づけでもありません。根の国で起きていることを把握できていないわけですから。

先にふれた折口信夫先生による教育観「日本の教育は感染」は、皇太子や貴族の教育をふまえてのことでした。教育役の大人よりも格上（神格）レベルの存在である皇太子や貴族の子弟に対して、「教える」という事ができるのか、ということです。

この発想は何も皇室や貴族内だけのものではなかったと思います。「心の遺伝子」とも言えるような心意伝承がすべての人々の無意識の奥底に生得的に蓄積されているという上原先生の立場からいえば、「教える」教育ではなく「引き出す教育」というのは自然な発想です。脳だけではなく、末端までの各臓器が本来の機能を発揮し、連携してこそ健康な一人の人間となるわけですから。

日本人の発想の根源には八百万の神々に象徴されるような森羅万物すべてに神性が宿っている、というものがあります。それを仏教的にいえば、弘法大師空海の「ことばも含め、宇宙の存在すべてに大日如来が宿ってる」ということになります。西洋でもこうした発想は、幼稚園の創始者として有名なドイツの教育学者「フレーベル」の「万有内在神論」にもみられます。

後述しますが、そうした発想が根底にあるからこそ、全身の感覚を通してあらゆるものと共鳴しあう能力を高めることが教育の重要なテーマとなります。

前稿でもふれましたが、学校教育制度が整っていない頃の日本人は「七つまでは神の内」という発想で幼い頃はかなり自由を与え、その後の通過儀礼でだんだんと躾を行いました。そして多くの場合、大人ではなく、子ども組・若者宿等々の近い年齢の者同士のやりとりを経てだんだんと大人としての意識を整えていく、という手順を踏んでいました。

そうした点から考えると、教師主導の授業ばかりでは大切な能力は伸ばしきれないことも分かってきます。

『上原語録』

・事態によって発想が次々転換できる、っていう先生が小学校の先生でなくちゃ絶対だめだと思う。何故かというと、子どもがそうなっているんだからね。子どもに対応できないってことなんだ。子どもと同じような発想をしてやることだ。現場の先生は。（平成六年合宿）

・「いい先生」っていうのは子どもの味方をしてやれる先生ですよ。ただ、現象的な味方ではかえって軽蔑される。本当の深い所で味方してやるんです。子どもの潜在性に入っていって子どもと秘密を持つんです。「先生だけは自分の事を知っている。」って。（昭和六十三年六月例会）

３、最新の「成長観」と「上原輝男の教育観」

もう一つ私が注目しているのが、この番組です。

「ヒューマニエンス 40億年のたくらみ

人間らしさの根源を、科学者は妄想する。」シリーズ　　２０２０年１０月１日～

この番組の大きな特徴の一つが「妄想してみよう」という言葉です。素人と専門家が、科学的な事実から大胆に「人間の感情生活」等々と結び付けての仮説をたてながらやりとりをしています。

それは前稿で紹介した、駿煌会やエナベルにおける「連歌的発想のやりとり」「拡散的思考（この思考には、論理思考だけではなく感情思考・イメージ思考も含みます）「類化性能」等々にも通じる大切な姿勢です。

上原先生が国語教育の柱としてかかげたのは次の４つです。（注６）

・「思考」（感情思考・イメージ思考・論理思考）

・「感情」（イメージ運動なども含む）

・「構え」

・「用具言語」（知識も含む）

これらが人間の成長していく過程でどのように関わり合ってくるのか、ということが長年の私の大きな関心事でした。

本稿のもう一つの目的は、人類の進化の過程で獲得された様々な人体の仕組みに対応させて、これら上原先生の教育観を整理してみたいということです。それが「自然の理」にかなった、教育カリキュラムの基本的な枠組みだと思うのです。

少し長いですがまず「思春期」（2020, 12, 17 放送）でのやりとりを紹介します。なお話の展開の都合上、やりとりの順序を一部かえています。

専門家の方は進化人類学者（総合研究大学院大学学長）長谷川眞理子さん

東京大学（大学院総合文化研究科付属進化認知科学研究センター　准教授）小池進介さん

テロップ　『思春期　無鉄砲さの意味』

・ナレーション　命を失うリスクも顧みず、何故思春期は無鉄砲になってしまうのか？

実は最新科学では、それには性ホルモンが深く関わっているということが明らかになってきている。…特に性ホルモンが作用するのは脳の最も内側にあたる場所。ここには偏桃体と側座核というものがある。

偏桃体は怒りや悲しみなどの感情を高ぶらせる働きがあり、側坐核は欲求を高めリスクを顧みなくさせる。性ホルモンはここを活発化させるのだ。だからこそ思春期には後先を考えず、欲求のままに行動してしまう無鉄砲さが生まれてしまう。

・（ホルモンの変化のグラフ）

ナレ　なぜこれだけの大きな変化があるのか。それは１０歳くらいまでの体の変化に秘密があるという。

長谷川　脳みそを作っているんですね。脳みそがこんなに大きい動物はいないので、まず脳と体を同時に大きくさせていくことは出来ない、不可能。だから容量として脳みそを先につくっておいて、一応これで大きさがいっぱいにできました、となったら大慌てで体を成長させて性成熟に駆け込むわけです。

・小池　これまで一般的に思春期は 18 歳までとか（生理学などで）決められていたんですけど、（脳の）研究成果からすると思春期というのは、場合によっては３０歳までと考える必要がある…

（神経細胞のミエリン化について解説）

小池　（ミエリン化が起きると）神経細胞が信号を送るスピードが速くなる、って言われています。

ナレ　…ミエリン化が起きる神経線維は、主に脳の中間部分に集中している。なぜここがミエリン化すると思春期が終わるのか。

実はその内側には「無鉄砲」さや「イライラ」を生む側坐核や偏桃体があり、外側には大脳皮質がある。ここは理性的な判断や計画性を担う部分だ。

つまりミエリン化される中間部分は、この二つをつなぐ役割がある。内側がもたらす無鉄砲さやイライラも外側の理性や計画性で上手にコントロールされるようになっていく。それによって、人の長い思春期は終わりを迎えるのだ。

人類が進化したり、生息域をふやしたり、文明を進歩させてきた原動力になったのが、思春期特有の感情エネルギーの恩恵であったという内容です。

上原先生の言葉で言い換えれば「イメージ運動」の持つ運動エネルギーうことになるでしょう。一般に「イメージ」というと、何を想像したのかという内容に注目されますが、上原先生が注目されたのは想いが何をきっかけに発動し、どういった方向にどう伸びようとするのかという「イメージ運動」でした。

この思春期の流れと関係の深い上原先生の言葉をいくつかあげてみます。

『上原語録』

・イメージが人間の生命を誘導しているという事です。…イメージは絵ではない。『イメージ活動』『イメージ運動』としてつかまえなければだめです。

人間活動の源泉・・・エネルギーなんです。

（平成七年五月例会）

・イメージは何かに伴うのではなく、イメージが

現実を動かしていく。（平成元年九月例会）
・現実いっぱいの子ども達は「壁にぶつかった」そうしたらこの壁を抜けないですよ。だけどイメージ力のあるやつは突き抜けていく。
現実の時間・空間とは違う世界に入っていけるんですよ。『ああ、この子は新しいイメージの世界に入ったんだ』と、これでいいんですよ。…
だから人間ってやつはいつでも時間・空間の継続と裁断を行いながらイメージを展開させているわけ。（平成七年合宿）

「容量として脳みそ」の完成にあたる時期は、ちょうど小学校の中学年、それまで夢の世界（イマジネーションの世界）を中心にして生きていた子ども達が、現実意識や論理思考に目覚めはじめる転換の時期に対応しています。これを上原先生は「（夢）分母と（現実）分子の逆転の時期」と呼んでいました。

この中学年の時期の教育として上原先生が盛んに強調していたのが「言語操作性」（感情と切り離されたことばの世界）と「論理思考」の訓練です。

そして高学年以降は、夢の世界と現実の世界を自由自在に行き来しながら、自分をより豊かにしていくことに目覚めさせていく段階、とされていました。（分母と分子を自由自在に入れ替える修練、という言い方もされていました。）

一般に右脳が「イメージ脳」左脳が「論理脳」と呼ばれていますが、その両方の脳のバランスが発達するのが高学年以降の課題、というよう私個人としてはとらえてきました。

しかし今回のミエリン化の話では、脳の内部と外側の大脳皮質との連携がクローズアップされています。番組内では出てきませんでしたが、全前頭前野も大脳皮質の一部として大いに関りがありそうです。

上原先生は「感情」を一般的にいわれる「喜怒哀楽などを文章から読み取る」という捉え方をしていません。先ほどから出ているような「エネルギー」という捉え方の方が先生の真意に近いと思われます。

その点からいえば、「右脳と左脳の交流」というよりも、今回の番組で示されていた、大脳の内部と外部との交流という、今回の番組の視点の方がより根源に近いのかもしれません。

４、「現代人の歪み」と「知識教育」

番組の中では、ミエリン化のデメリットと、それを回避するための方策に関してこんなやりとりがありました。

・長谷川　ミエリン化っていうのは結局、ある状況に対してルーティン化してすばやく解決できるようにする、っていう仕事をするんだけど、逆にいうと融通がきかなくなる。

ゲスト　ではそのミエリン化が進んでいるうちにいろいろ取り入れると柔軟に判断できるようになるということですか？

長谷川　どのくらい手をたくさん出していてからミエリン化するか。（海外のバイリンガルな人の例）ミエリン化が起こる前の段階から（多様な）神経のつなぎができている。そこでミエリン化が起きれば全部が（生かされていき、より多様性もでてくる）

ナレ　学習したことや練習したことはミエリン化が起きるとパワーアップされる。
（ミエリン化が一段落した３０歳以降の学習も、学び方によっては大きく変容に関与するという話もでました）

そして現代の若者に起きている異変に関しての番組内でのやりとりがこれです。

東京都医学総合研究所。社会健康医学研究センター、センター長の西田淳志による研究の紹介
ナレ　この研究から現代の思春期に起こっているある異変がみえてきた。それは「意欲の低い子ども達」。（そんな）子どもには共通点がある…
「人に迷惑をかけないこと」が最も大切だと思っていたのだ。

西田　人に迷惑をかけてはいけない、という価値意識を強く持ちすぎると、結果として意欲の発露

に影響を与えてしまう。チャレンジすることをやめよう、チャレンジしないで無難にやっておこうという、そういう考え方になりがちなんですよね。そうすると思春期に本来必要なトライ＆エラーの経験が十分に蓄積できない。

「人に迷惑をかけない」というのは、かねてより日本人が最も大切にしてきた躾の一つです。それが何故現代人の歪みにつながってしまうのか？

その大きな要因として「お互い様」という意識の欠如があると思います。現代社会においてはこの迷惑をかけてはいけない対象としての「人」が上に立ち主導権をにぎっている者を指しているのが実際のところではないでしょうか。極端な例ですが、学力テストの日に冗談まじりにとはいえ、成績の悪い子に「学校休めよ」などという教師がいたというのもその端的な例です。

上の望み通りになれないと、自分には居場所がない、どころかみんなにとって邪魔な存在、早く消えてしまった方がいいという気持ちに支配されてしまう・・・競争原理による成果主義がはびこっている現代は、まさにそうした空気が圧倒的に強いです。

すぐに「分かった」と反応できることばかりが求められているわけですから、じっくりと考えようという思考力も育ちません、幼い頃から繰り返されるそうしたやりとりによって、現代人は、間違いや失敗や不完全が絶対に許されないものだと思い込まされています。

もともと日本人は「修理固成」といいう言葉に象徴されるように「トライ＆エラー」を非常に大切にしてきた国民であり、それが自己教育原理でもあったはずなのですが。

それゆえに自分にまだ分からない部分があることを知られないように必死になってしまう。あるいは分からないことがあると、考えてみるよりも先に、すぐにネットで「正解」を調べ鵜呑みにする…。

学校教育が知識偏重になりすぎているという指摘は何十年も前からあります。しかし上原先生は正しい知識教育は、特に中学生以降の段階ではきちんと行う必要があると説いています。

健全な知的刺激は、未知なるものにワクワクするような好奇心を発動させます。新たな知識を得たころから新たなイマジネーションの世界を広げて楽しむ、などという人間性の豊かさを自ら獲得しようというエネルギーの根源に直結します。

しかし興味・関心と全く無関係にテスト対策として詰め込まされる知識教育は、ワクワクどころか、条件反射的に拒絶反応を起こす状態にしてしまいます。

上原先生の発想に立った場合、知的教科がどのように位置付けられるかに関しては児言態雑誌１９号に掲載済なのでここでは繰り返しませんが、次の言葉は紹介しておきたいと思います。

『上原語録』

今日の学校教育は表面づらばかり撫でる事を子どもに教えている…今の子ども達に気力がない。やっぱり「教えなくちゃならない事、リードしてあげなくてはならない事」というのは「生命の燃焼だ。いや、爆発だ。」あれでなくちゃね。

イメージは生命力なんだから。（平成六年合宿）

・言葉は『履歴書』です。『人生の糸紡ぎ』そのものです。

（昭和５９年度　児童言語の研究　講義）

５、「大脳の誤作動」と「音声言語」

児言態雑誌１８号では「世界定め」という観点から、脳がつくりあげた世界が、体感を伴うほど現実味を帯びた世界になることを述べました。

日々受け入れてきた言葉によって、個々人にとってそれぞれの「現実の世界」が成立するわけです。場合によってはかなり歪んだ世界を実際にそうだという形で作りだします。それがさらなる脳の誤作動や歪みを引き起こす、という連鎖になっていきます。

そうした脳の誤作動を防ぐため、あるいは仮に歪みが生じてしまった脳への軌道修正のために、最も必要なのが、全身の感覚を刺激するような「音声言語としてのことば」だと考えられます。

『上原語録』

・児言態ではこのように言葉を集めているんで

すが、言葉の活字スナップは、本当はダメなんです。言葉は音声ですから、音声分析をやらなければならないんですよ、本来は。感情を声にどう託しているか、っていう。

言葉は『肉体の性能の一つ』でもあるんですから。（昭和５９年度　児童言語の研究　講義）

→児言態のいう「ことばのスナップ」は、（1981）「はなぢがナンでぇ」（童心社）等々に収録

・音声言語は、文字言語と並立関係ではない。音声言語の投影が文字言語なのである。（昭和５８年　感情教育論　学陽書房）

・子どもたちはその音声化された結果、またはその内容を習っているのではない。音声化自体を習うのである。肉体の発育過程を過程化している状態がことば習得の原態と言わねばならないのである。

これが習慣化するのを、一般的には記憶と呼ぶものだから、内容が獲得されたように思い、思考を逆立ちさせて、ことばの内容を記憶することが言語学習だと思いがちなのである。

音声化を記憶するのではない。音声化することが記憶なのであると言おうとしているのである。（昭和５８年　感情教育論　学陽書房）

ヒューマニエンス「心臓」ではこのようなことが紹介されていました。

ナレ　心臓を移植する手術。こんな驚きの話をきいたことはないだろうか。
心臓をドナーから移植されたとき、受け取った人の性格や好みがガラリとかわったというエピソード。（事例紹介）
そもそも常識的には「意志」や「記憶」が宿っているのは私たちの脳である。心臓はその脳の命令を受けて血液を送るポンプにすぎない…つまりあくまでも主体は脳であり、心臓はどちらかといえば脳に従う存在、とされてきたのだ。
ところが最新研究からみえてきたのは、それとは全く異なる関係だという。教えてくれるのはスタジオにもお越しの日本医科大学教授の柿沼由彦さん。

柿沼　…脳からの情報が心臓にいくのと、心臓からの情報が脳にいくのと、二方向性なんですけど、その割合は、8割～9割くらいは、心臓の情報を脳に伝えている。
ナレ　…ストレスが長くかかった状態が続くと、脳自身がダメージを受けてしまう。
そこで心臓は「自分がちゃんと動いているから大丈夫」という情報を副交感神経の一つ、迷走神経を通して脳に返すのだ。
そのおかげで脳は過度のストレスから解放されるというわけだ。

また同番組での「腸」の回ではこのような話から始まりました。

腸は自らが“考え”行動する臓器だ。１億もの神経細胞と、栄養を判別するセンサーを持つ腸は、脳とは独立した生命体のように活動する。脳の神経細胞は、もともと腸から生まれたことから、いわば脳の親ともいえる存在である。

さらに「人格」や「感情」、「好み」といった脳の本能的な部分に、腸が深く関わっていることもわかってきた。

腸と脳という二つの“考える臓器”が交錯する、人間の根源を妄想する。

実は、心臓や腸だけではなく、あらゆる臓器が感じ取っていることが、脳にも大きな影響をあたえ、人格や感情にも大きな作用を及ぼしている、というのが「人体」や「ヒューマニエンス」の各回でいろいろと紹介されています。皮下脂肪や腸内細菌さえもそうした役割を持つことが明らかになりつつあるといいます。

そう考えた時に、「ことば」が音声であるということ…つまりことばの音の響きがどのように体感され、身体記憶として蓄積されているのか、それがことばの意味的な内容以上に重要であるということです。

私の勝手な想像ですが、心臓移植の場合も、もともとのドナーの体がどんなものを食べたりどのようなことをしたりした時に心地よさを感じ、脳にそうした信号を送るのかという反応を心筋細胞がインプットされているため、とも考えられます。

それと同様なことが全身の細胞にインプットされていく過程そのものが、人間の生きる営みそのものなのではないでしょうか。

注４で紹介した、児言態とも関りの深い藤岡善愛先生は「イメージタンク」というたとえで、体の外側と内側、そしてその境界にあたる「感覚器」の相互作用についても述べられています。

この原稿を執筆している現時点では、まだ放送されていないのですが、３月４日放送予定のヒューマニエンスは「皮膚」がテーマ。番組ＨＰの予告にはこうあります。

「皮膚」には、目でなくても“光”を捉え、耳でなくても“音”を聞き、舌でなくても“味”を知るという感覚が備わっていることがわかってきた。

その皮膚の能力は生命進化において、脳が生まれる前から存在していたため「０番目の脳」とも呼ばれる。

皮膚の存在は自分の内と外を区別するために不可欠。そのため、もし皮膚感覚を失うと「私」を認知できなくなり、自己を喪失してしまうという。皮膚に秘められた驚きの力を妄想する。

先にふれた折口先生の「教育は感染作用」ということも、このことと深い関係があると思います。

それをさらに拡張すると、「ことば」以外の身体感覚もすべてが脳に影響を与えているということです。

よく言われることですが、落ち込んだ時に姿勢を正したり、星空をみあげたり、深呼吸をすると気分転換になる、というのも、身体感覚から脳をコントロールしようということです。リラックスしている体の状態を「型」として作る、それによって脳が認識している意識世界を変えるということです。現代人は「型」の文化に対して「自分を縛るもの」という誤ったイメージを持ってしまいがちです。実はそうではない。これまでの自分が作り上げてきた意識世界の枠を飛躍的に拡張させるのが日本人の考えてきた「型」の文化だったわけです。

脳の誤作動・歪みの修整に関して、先日放送された番組内で「バカの壁」で有名な解剖学者の養老孟司先生も同様のことを語られていました。(注７)

基本になっているのは体でしょ…脳みそは体の中に置かれているんですから。脳みその直接の環境は体なんです。

…ものを考える最終的な基準は何か？っていうことですよ。人が考えるときの基準、それは大体「自分の体」なんですよ。体が変わらないものとすれば、それの言う事に素直に従っていればいいわけでしょ。身体が暗黙の基準なんですよ。理屈じゃないから。

…脳みそは面白くて、長い時間そのことについて考えたり感じたりしてると、どんどんどんどん現実感が強くなってくるんですよね。脳みそはそうやって世界を作っちゃうから。

あんまり変なものに現実感が強く付いちゃうと具合悪いんだよ。バランスが変になってくるでしょ。

それは仕方がないんで、それを修正する唯一の方法は、入ってくるものを変えてやることですね。

…こうやって空をみて、木の枝を見ていると少し違ってくるんです。時々こういうものを見て、自分のなかの現実感を調整したほうがいい、っていうことですね。

５、早期英語教育等々による「ことばの感覚」の崩れ

上原先生の母国語教育に関しての主張は児言態雑誌１９号や、前稿でふれているので、改めて繰り返しません。

ただ、日本語の特性として「言霊信仰」などという言葉さえあるように、漢語・外来語以上に母国語としての日本語は意味伝達よりも、音の響きに感覚を伴わせ、それと互いに響き合おうとしているという特徴があります。そうでなければ、例えば人称代名詞を外国人が不思議がるほど、あれだけ多様に用意などはしないと思います。

私の教え子に２５歳でイギリス留学を思い立ち、２６歳で実際に１年間過ごしてきた若者がいます。彼自身の言葉でいえば、学校で習った英語はかなり忘れていて、行きの飛行機内で中学校の

英語を勉強し直していたということでした。住み始めてもしばらくの間はほとんど聞き取れなかったという事です。

そんな彼の体験談で興味深かったのは、日本のアニメについてでした。様々な国々からの留学生が集まっていた中には日本のアニメの愛好者がたくさんいたということなのですが…彼の言葉です。

「むこうの人たちが日本のアニメを観る時って、吹き替え版はあまり観ないんです。日本のアニメは日本語のままで観ないとダメなんだって。

言葉の響きが大事なんだって。音がいいんだよって。だからもとのアニメに英語の字幕がついているもので観ている人が多かったです。

ホームステイ先でも好きな子がいて、寝ていると隣の部屋から日本語が聞こえてきて・・・アニソンも・・・なんだか変な感じでした。

アニメのことをいろいろ聞かれたんですが、あまり詳しくないって言ったら、本当に日本人か？って。フランスの留学生には、知らないなら教えてやるって、下宿先に呼ばれて、日本のアニメを山ほど毎晩みせられてたんですけど。」

日本に関心のある外国人の方が、日本語の特性について魅力を感じ、原語の響きを大切にしてくれているというのは何とも皮肉な話です。

そうした音声面の特性をもつ日本語を母語としているだけに上原先生は、早期英語教育が子ども達の心に与える影響について危惧していました。

数年前ですが、近所のスーパーに行ったおり、母親につれられた４歳くらいの男の子が大きな声で「グランマ！」と日本人離れした発音で叫びました。するとアロハシャツを着た年配の女性がニコニコしながら「ハアィ」と近づいてきました。

その後のやりとりを耳にしていたのですが、この家族は普通の日本人で、日々英語教材でトレーニングをさせていて、家庭内でもなるべく本場の英会話をしているというのが察せられました。

それぞれの家庭教育の方針にとやかく言う気はありませんが、この時に非常に気になったのは、はたしてこの子は将来、昔話や周囲とのやりとりで「おばあちゃん」ということばの響きを聴いた時に、何も情感が湧かない人間になってしまうのではないか、ということでした。

前稿でも軽く触れましたが、ＮＨＫで放送されていた、乳幼児期からの英語の早期教育がコミュニケーション障害や、心の歪みになっている子どもが増えているという問題。（注８）

２０１１年の番組でしたが、今はその頃よりもさらに早期から徹底した英語教育が行われている家庭や幼稚園、学習教室が増えています。そうした中、子ども達の現状はどうなっているのか？そうしたことへの研究がどれだけ進んでいるのか？問題提起をする番組等々はほとんど目にしたことがないので分かりませんが、より悪化しているのではないかと危惧しています。

ちなみに先ほどの海外留学経験の教え子は「ネイティブの発音獲得」に関して自身の体験からこのように語っていました。

「発音は基本関係ないですね。イギリスだと、たとえきれいな発音でも“それはアメリカ英語の発音だよ”って言われちゃいますから。

実際にたくさんの国から留学生がきていても、それぞれの国が出ちゃうんですよね。フランス英語とかイタリア英語とか。でもそれでちゃんと会話が成り立っていましたよ。

一番大切なのって、「こいつすごいな」「こいつ面白いな」って思ってもらうことです。

英語が話せるなんていうのは、別にすごくないですから。みんな話せてますから。日本人なのに日本のこととか知らないと、もうそれ以上関わらなくてもいい人間だと思われます。普通の街行く人と同じですから。その人にとって気になる存在じゃないんで。寄ってきてもらえなくなります。」

それで彼は「日本人代表」というつもりで渡ったのだと言います。そのため留学に行く数か月前から、英語の練習よりも、折口先生や上原先生の著書に出てくるような日本各地を実際に旅していました。アニメについては詳しくなくても、日本人の意識の根源について、ネットなどの知識では得られない生きた体験をしている存在であるというように受け止めてもらえていたようです。

彼の体験談は、現代日本での早期英語教育に対して耳を傾ける価値があると思っています。なのでまた稿を改めたいと考えています。

感情教育論の中で上原先生は南米などの日系人の言葉の実態調査に行った際のことを紹介しています。その中で特に孫である３世の子ども達にとっては、日本語は外国語という感覚になってしまっていることを嘆く日系１世の方々の言葉を紹介しながら、こう述べています。

『上原語録』（昭和５８年　感情教育論　学陽書房）

（日系一世の方に）日本語を外国語とは冗談ではない。日本語は我々の父祖の血脈なのだとする、一斉の熱い叫びが残っていることも記しておかねばならない。…

日本語を教えるのは、規律正しさ、正直、勤勉という日本人の長所を保持させるためである」と。

この人たちの頭の中には語学としての日本があるのではない。血液としての日本語のゆえに、その喪失と転換を阻止しようとする信念だと思えたのである。（Ｐ１９９）…

ある長老が、さりげなく、「教育とは親の感覚を子どもに移すことだ」と述べたことも、異郷の土地で、子々孫々とともに生きていくことの意味を、一世たちは模索し続けていることが痛いほどわかった。（Ｐ２０８）

生まれ育った地域の方言（育った国の言葉）に対して母国語という愛着を感じられない、という場合もあるわけですから、他の地域の言語の獲得を一概に否定するわけではありません。

ただ、母国語として獲得した言語によって人間性の深い部分がどのように形成されているのかという点はふまえておく必要があると思うのです。

中高生のように「大脳の知的分野」で新たな言語を習得する段階以前に、異なる言語体系を混在させることに関して、上原先生はこのように述べています。

『上原語録』（昭和５８年　感情教育論　学陽書房）

移住者子弟が今後どのようにバイリンガー（二言語併用者）に成長するものかについての研究も大いに期待されるが、私が最も関心を抱くのは、移住に伴って、いわゆることばがいかに出来るようになるかについてではなくて、述べて来たような言語感覚の移乗についてである。いわば、体質の変更の可能性及び、体質そのものの変貌性についてである。平たく一口に言うと、どんな感覚の持ち主の子が出来上がっていくのかということである。

日本語には、「ことばつき」という言葉がある。日本人としての言語感覚の持ち主ならば、「ことばつき」が変われば、人が変わるということを認めるであろう。移住とは、言語混血を敢行することによって、この「ことばつき」を変えしめ、地球上に新しい人間誕生を試みていることかもしれないと思う。（Ｐ２１２）

私が、言語混血というような新造語を用いた意味も、少しは理解していただけただろうか。

そして、ことばとは、人間の外にあって、覚えてそれを使う道具ではなく、人間生態の最も重要な一つとしてとらえなおさなければならぬものであることの納得が少しはついていただけただろうか。

ことばは生ものなのである。人間の生きる姿の影法師として、いつもいつも人間につきまとって正直な影を落とすものだということを。

だからこそ、少なくとも、親なり、子どもの師匠なるものは、言葉の番人としての指導よりも、生身と一つになった言語生態の変化、あるいは発展を対象としていると言うべきだったのである。（Ｐ２１５）

海外には数ヵ国語がペラペラ話せる人が珍しくない、という話から「負けてはいられない」という気持ちになり、我が子にも早くからそうした語学力をつけさせたい、と考える親のこともよく耳にします。しかし特にヨーロッパ系の言語は基本としている体系が共通しているわけですから、日本人が異なる言語を幼い頃からという場合とはかなり事情が違ってくると思います。

「子どもの為」が本当に子どもの為になるのか？その子どもが大きくなった時に、感性や感情等々でハンディを感じるようになってからでは手遅れですし、それに対しての責任もとれないと思います。

そのようなリスクをおかすくらいであれば、こ

れまでの通り、中学生段階の頃に外国語教育をしても十分であると私は思います。もちろんテスト対策に偏ってしまっては何にもなりませんが。

日本語に限らず、ことばが意味伝達以上の大切な部分を担っていることを示す海外の研究があります。（注９）母国語の感覚が最も発達すると言われている生後九か月の赤ちゃんに、乳児向けの外国語教材を与えての実験です。ビデオで学習させた子どもと、それと同じ女性が全く同じ内容で同じ時間、直接対面した子どもとで比較しています。その結果、ビデオの場合は、見せていない子どもと全く変わらない。直接対面の場合は大きく変わったというのです。

これが日本人にもあてはまるのかどうかは分かりませんが、大変興味深い結果です。

ビデオ教材などを使って乳児期から英語教育を行うという場合、普段は家族が日本語で接していている中で、という場合であれば、まだ感覚へのダメージは少ないのかもしれません。しかし、なるべく英語漬けにしようということで、長時間映像教材や音楽ＣＤを聴かせっぱなしの場合は、外国語が身に着かないどころか、日本語も乏しい、感情やコミュニケーション能力も欠如した大人に育ってしまう危険が高いかもしれません。

６、「共鳴できる体にする」ことが「素直な心を育てる」

児言態の月例会録音テープで「素直な心を育てる」というテーマのものが発見されました。ただしここでの「素直」とは、世間でよくいう「素直に大人の言う事をきく」式の意味ではありません。文字通り「素（内なる意識世界のナマの自分）に、直結している子」という意味です。

ですから、素直な子ほど、不自然なこと、歪んだことを強いる相手に対して反抗的になります。

その中から、最新科学で明らかにされてきた「身体感覚・臓器感覚」等々のことと関連が深い内容の言葉をいくつか紹介します。

『上原語録』（昭和５７年９月１９日）

・少なくとも１つの条件としては素直だっていうことはね、「感性」ということを失っては素直さなんてありえないんだ、ということね。

・自己解放でなければ素直にはならないということなの。自己閉鎖をしていては、素直さは出ないということなの。

・（高学年で真の素直っさを失った子について）自己存在のさせかたが、狂い始めたんだよ。いわぱ対自然になってきたんだよ。素直さっていうのは自然の中でなくちゃならなかったんだよ。

・もう少しちょっと程度を落として言うとね、過信はいけないの。過大評価だよ、自分の知恵にこだわったんだよ。

・分かる自分であろうあろうとするから、分からないということだね、子どもは。

そういうふうに育てたんだよね、世の中が。勉強するというのは分かるために勉強してるんだ、とこういうことを思わしてしまったんだ。そう簡単にわかるか！ということであったらいいのよ。…それは　宇宙の論理がそう簡単に分かるか！っていうね、お前はまだ子どもじゃないかっていうようなことをいう人すらもういないのよ、今は。

何年生になったらこういうこと分からなくちゃいけないって、こういうんだ。

・世間一般の常識みたいなものをどんどんどんどん植えつけようとしているわけよ。

・素直であるということは共鳴しなくちゃだめなんだよ。自分の全身を通して共鳴できるかってことなの。だから、自分の体が鳴らなくちゃ駄目なの…いかに生きるかということは自分の体をいかに共鳴体たらしめていくかということなんだよ。

・特にやっぱり物質文明が興って来るとダメなのよ。日本人が豊かになってきたら、全然体が鳴らないのよ。

・感性っていうのは何を感じ取ったか、ってなんていう問題じゃあない。何を共鳴したか、っていうのはそんなもの共鳴のうちに入らないんだよ。自然界はいつでも音を立てているんだから。…何をつかんだっていう段階では、まだだめなんだ。…何か探そう探そうとこうやるからさ。だから見えないんだよ。

この内容と関りの深いやりとりが、平成２年６月２３日の月例会でもありました。

『上原語録』

・（振動や波に関しての物理学の話題から）

…力学の勉強をしたいなと思ってるわけよ。これが生命原理ですよ。…教育にもし一つの技術があるとするなら、宇宙の振幅の原理をつかまえること以外ないですよ。

・宇宙の原理が聞こえてくるということですよ。そして自分の思考を宇宙原理と合わせることが出来るということになるから。そりゃあ幸せなんだよ。

・児言態のやってることというのは、…哲学者や宗教者が言うようなことをもっと卑近なことで、子どもを捉えたら必ず出てきているということを証明しようとしている、そういうことだよね。

異なる文化圏で育って基本的な発想や感覚が違っていても、本当の意味で「素直」な構えになれば、日本人的な自然観などへの意識の転換（トランスフォーメーション）が起こりうるということを示している一例として、先日放送されたスピリチュアルジャパン「山伏」の中で、３日間の山伏修行体験をした外国人と山伏とのやりとりを紹介したいと思います、（注１０）

『瞑想修行後

アンドレア　なるべく客観的に考えようとしてたんですけど、やっぱりどうしても自分のことだから、自分の感覚が入ってしまう…

マンディ　人間の性格は小ちゃいころから経験があって、その結果はいい経験と悪い経験がありますよね。

山伏　出たな。西洋人の考え方だな。

アンドレア　何かをするたびに、何のためにやっているかをずっと考えているんですよ。

山伏　「理由中毒」だよ。

・滝行後

アンドレア　今朝の瞑想は…「自分」から離れなかったんですよ。…滝のおかげで客観的に　自分　のことを見れるようになったかもしれない。本当に　自然・滝　と一体化できたような感じになった。

・山の中での修行

山伏　近年の西洋だと、山を征服するという感覚が強いと思うんだよね。我々は全く違うわけよ。山へ行ってそこで何かをもらってくる。恵んでくれる。大事なところという感覚が芽生えるわけだよね。

アンドレア　山が神様で、登れることによって僕も一体化するかのような感じだったんです。』

７、「体質」に応じての教育

ヒューマニエンス「スリル」（2021,2,4放送）の回では、スリルのあることを好むタイプと好まないタイプとでは、成長過程の体験の影響による違いだけではなく、仮に幼い頃に同じ体験の手順を踏んだとしても、意識身体の生理学的な反応や、脳内の電気信号の伝わり方・ホルモンの出方そのものというレベルから違っているということをうかがわせる内容でした。

これも思春期時の感情と同様に、人類が進化・発展していくための原動力になった感情だということなので、うっかりするとスリルが苦手という子は劣るとされがちです。しかし番組では苦手なタイプ、求めるタイプ、それぞれメリット・デメリットがあり、その両方のタイプが歴史上も、また現代においても必要であり、協力し合っていかなければならないということでした。

こうしたことも現代の学校でも社会でもどうでしょうか。望ましい子ども像（人間像）が決められ、「そうなるのが当然」「なれないやつはダメ」とされる風潮が非常に強いと思います。

例えば「外で大勢の友達と元気よく遊ぶ」のが性格的に本当に苦手な子だっています。でも、そういう子は社会性がない問題児、場合によっては発達障害という烙印をおされてしまいます。

深刻なのは、先の大脳の誤作動とは違って、むしろ世間一般的には「１００％正しい」とされる価値観が画一的に要求されてしまう場合です。

体質的に受け入れる素養のある子ならいいでしょう。しかし、そうでない子は、必死に「そうなりました」を演じ続けるか、自分の殻に閉じこもってしまうかのどちらかです。

もちろん集団が苦手な子でも、みんなと楽しく過ごす時間が持てるようにという働きかけは必要

だとは思います。でも、そうした子の内面に寄り添った働きかけを続けているでしょうか？無理をさせているほど、その後の丁寧なケアが必要なのに、普通は「ああ、みんなと遊べるようになったな。」と安心して気にもとめなくなる、そんな場合が多いのではないでしょうか？

農耕生活が身近だった頃は、作物によって適切な育て方が違う、というのはごく当たり前の発想でした。しかし高度経済成長のオートメーション大量生産や、同じ情報があっというまに共有されてしまう現代社会においては、そうした個々人の体質の違いが、ますます配慮されずにいます。

「人それぞれ」という言葉はもちろん現代の若者も使います。しかしネット上のやりとりなどをみると、本来の使い方とは違う。自分の意見を認めたい者たちに対して、自分のやりたいようにやるための口実として「人それぞれなんだからいいだろ」を使っています。そのくせ異なる意見は許さない…そんな姿勢が社会全体にも蔓延しているように思います。

ＮＨＫ「人体　遺伝子」（2019, 5 放送）ではこれまで遺伝子として認められていなかったトレジャーＤＮＡやＤＮＡスイッチのことが話題になっていました。これらのことから、全く同じ事が個々人によってプラスに作用することもマイナスに作用することもあるということが遺伝子レベルで解明されたということです。

ですから「欧米では…」「前の子どもたちは…」ということが通用する場面がどんなに多くても、体質として全く合わない子がいるし、それは決して異常な子でも何でもないということなのです。とかく人間は、自分の実感が伴って納得している事柄ほど、「当然のこと」「それが常識」と認識しています。

だから逆に自分の体感とは違う働きの人間に対して共感できない、異端視してしまいがちです。

一つ例をあげます。エナベルで精神を病んでしまったという方々の間でも傷つく言葉としてよくあげられるのは「辛いのはあなただけではない。世の中にはもっと辛い人がいる」等々の言葉です。こうした言葉で奮起できるタイプならいいんです。でもこうした真っ当な言葉を言われれば言われるほど「それでも変わることの出来ない自分は本当にダメな人間」という自己否定感・罪悪感が募ってしまい、ますます追いつめられ、精神が壊れていってしまうと言います。

普通に先生方や周囲が何の疑いもなく投げかけている言葉、純粋に励ましの意味で投げかけている言葉も、相手の体質によってはとんでもない結果を生んでしいます。

そしてその体質には優劣などないのです。

だからこそ、上原先生の「子ども達の言語生態をつかまえる」という視点が大切になってきます。

８、おわりにかえて

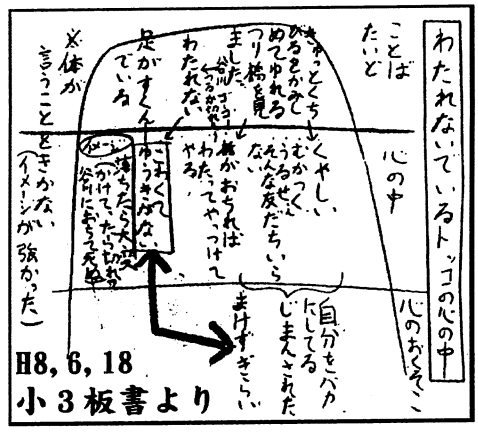
今回は上原先生の教育観の大きな枠組みを整理してみるという総論がテーマだったので、各論には踏み込めませんでした。

それらについては、今後も駿煌会（注１１）のブログやＨＰなども通して徐々に書いていきたいと考えていますが、今回は２点のみ、ごく簡単にふれて終わりにしたいと思います。

①「心の図」を用いた国語の授業

「心の図」とは教師になった頃からずっと授業で使っていたものです。この図をみんなで埋めていくうちに、表に出ている言葉や態度、その下にある意識世界（自分でキャッチできる気持ちなど）、そしてさらにその下に広大な無意識世界が広がっている、という見方が、自然に出来るようになります。

小学２年生に使った際も、心の奥底に「無意識」があるということを非常に面白がっていました。



この図を用いることによる利点の一つは、教師の期待する正解を探そうという意識から解放されることです。矛盾した気持ちが錯綜する場合も当

然あるわけですから、みんなの意見が活かされ、空白の部分を探ろうと話し合いが深まりました。

海の上に島が顔を出している、というイメージなので、海水をとればとるほどどんどん他とつながっていくように、個々人の意識も深いところではどんどんつながっていく、という上原先生の「心意伝承」や、ユングの「集合的無意識」の感覚等々も自然につかめていきます。

②アニメやマンガの世界も真正面から認める

人間のナマの生活感情を扱うことは上原先生が非常に大切にしていたことです。そのために心意伝承研究の素材として、子ども達の言葉や、歌舞伎を用いていました。

私はそれを現代に置き換えると「アニメ」になるだろう、ということで、家庭教師をするようになってからですが、アニメ好きな子には教材としてどんどん用いるようにしています。

学校の国語は大キライ・苦手という子でも面白がって取り組むうちに、いわゆる学力診断テストの結果も大幅に変わる子が多いです。

とかくアニメなどは、勉強の妨げになるとされがちですが、日本の文化として国際交流の上でもますます必須になってくるかもしれません。

アニメに限らず、本当に子ども達に合わせ、響き合う「ことば」の教育を考えるには、子どもの世界に対して次の上原先生のような見方ができるというのも、教育者の基本姿勢として大切なことなのではないでしょうか。

『上原語録』

・子どもはいつでも夢を見ている。その中に先生だから入れるということでなければ、(ならない)。ガンダムの世界、子どもの世界、夢の世界に働きかけている。(これが、)テレビ作家たちの仕事、教育力ということから言えばテレビ作家たちの方が優っている。

教育の世界に(は)、子どもの世界に触れるものがない。1992,9,15月例会にて

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（注１）宮田雅智（２０１８）「世界定めの主体としての我　～全教科・領域に渡る児言態的視点～」児言態雑誌１９号

児言態雑誌は広島大学リポジトリで閲覧可能。
https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/journal/JidouGengoSeitaiKenkyu

（注２）宮田雅智（２０１８）「世界定めの主体としての我　～全生涯を貫く児言態的視点～」児言態雑誌１８号

（注３）宮田雅智（２０２０）「母国語教育の支柱としての「構え」、再考　ー連歌の発想を取り入れた就労支援施設のグループワーク実践からー」国語教育思想研究　第２１号

（注４）折口信夫（１９３０）「枕草子解説」折口信夫全集第10巻27項、「歌及び歌物語」同10巻171項　上原先生は著書（1972）「芸談の研究心意伝承考」早稲田大学出版部12項、同17項等々で言及されています

（注５）藤岡喜愛（精神人類学　故人）、野口三千三（東京芸術大学名誉教授　故人）、竹内敏晴（宮城教育大学教授故人）、甲野善紀（古武術研究家　上原先生も注目していた方です）　養老孟司（解剖学者）
シリーズものとして（１９８２）「みんなの保育大学」（全６巻）築地書館

（注６）児言態として特集しているのは（２００９）「特集　児童の言語生態研究とは何か」児言態雑誌１７号

（注７）ＮＨＫ番組　（２０２１、１、１９放送）「まいにち養老先生　ときどき　まる　冬を仰ぐ」

（注８）　ＮＨＫニュース内の特集（２０１１年放送）「何が大切？早期教育」

（注９）ＮＨＫハイビジョン特集　（２００６，１２，１３放送）「赤ちゃん　脳と体の成長の神秘　～驚異の適応力をとらえた～」ワシントン大学教授　パトリシア・クールによる実験

（注１０）ＮＨＫ　スピリチュアルジャパン（２０２１，２，２１放送）「山伏」

（注１１）駿煌会　宮田が主宰する年齢も立場も異なるグループ。『アニメや理数や民俗学など雑多なことを通して人間（心意伝承）についてあれこれと考えようとしている年齢も性別も職業も違う４人でスタートした集まりです。・・・』ツイッター紹介文より
https://twitter.com/syunkoukai?lang=ja
ブログやＨＰのリンクもはってあります。